

「一生懸命」が私を創る

高崎市立長野郷中学校

三年 高井 希未

「生徒会本部役員に立候補した高井希未です。よろしくお願いします。望みは高く、理想も高くがんばります。」

そう言って、私は生徒の票を集め、当選しました。そして生徒会長という名誉ある役職に就いたのです。嬉しかった。そのとき私は、こう誓いました。これからは、私の「一生懸命」な気持ちを形にしていこうと。

幼い頃の私は、「一生懸命」に対して、どこか否定的で、格好つけていました。がんばることは面倒くさい、一生懸命なんて恥ずかしい、なんて思いながら生きてきました。でも、あるできごとをきっかけに私は変わったのです。

三年前の夏、小学六年生になった私は、母に連れられ、親戚の叔父の仕事場に出かけました。そこは何とオートレース場。夏の強い日差しが容赦

なく照りつける観客席で、熱気に満ちた人々が、レースを楽しんでいます。人々の目はレース場のバイク達に注がれています。すり鉢状に作られたコースには鮮やかな色の勝負服を着た選手達がバイクにまたがり、一体となつてまぶしく輝いています。最大時速150キロを誇るバイク達は、うなりを上げ、猛スピードでアスファルトを駆け抜けます。その中に、私の親戚の叔父がいました。いつもは穏やかで優しい叔父がそこではまるで別人のようにりりしく、そして勇ましく見えました。コーナーを激しく突いて順位を上げた叔父を見て、私は、

「そのまま一気に行けー！」
と思わず叫んでいました。命を賭けた男達の熱い勝負に体が震えました。

この日を境に、私のオートレーサーへの道が始まります。夢は多くの人に愛される、強いレーサーになること。そのためには、人並み外れた強い意志と絶対的な自信が必要です。勝負の世界に身を置くからには気持ちの弱さは命取りです。そこで、私は心を強くするため、何事も一生懸命取り組もうと決めました。

ちょうどそのころ、中学に進学した私は、大好きな吹奏楽部に入部しました。そして、打楽器を担当することになりました。厳しい練習が続きます。帰り道、上手くできない自分に落ち込みました。その度に、以前の否定的な、よくない自分の顔を出します。くじけそうなことも何度もありました。でも、意識を高く持ち、練習しました。あきらめずに一生懸命練習していると、少しずつ成長している自分に気づきます。成長の実感が、さらに私を高みへと押し上げます。仲間との強い絆も生まれました。こうして私たちは、初めてアンサンブルコンテストで金賞を取ることができたのです。

私はこのコンテストを通して、「一生懸命やること」の素晴らしさに気づかされました。また、「一生懸命」は決して恥ずかしいことではなく、むしろ幸せになる近道なのだということが、はっきりとわかりました。

それからというもの、部活動だけでなく、日常の学校生活に対しても、とても前向きに行動できるようになりました。どんなに小さなことでも、一生懸命に取り組んでみたら、意外と楽しかった

りするのです。

中学三年生になった今、私は毎日の生活の中で、どんなことにも「きっかけ」を大切にしています。「きっかけ」は、いつも目の前に突然やってきます。私は、そのきっかけのことを「チャンスの神様」と読んでいます。なぜならば、私が出会った多くのきっかけは、私という存在にいつも大きな影響を与えてくれたからです。そのチャンスは「余計なお世話だ、めんどろくさい。」「今は忙しい、あっちへ行け！」と追い払ってしまっただけでしょう。そうです。せつかく舞い込んだ幸せが逃げて行ってしまふのです。

私たちの手は、表と裏があります。手の甲と手のひらです。手の甲でチャンスを追いかけるのか、あるいは手のひらでつかみ取るのか、二つに一つです。私たちの選択は、常に目の前の自分自身の行動で決まります。そして、一度決めたなら、納得がいくまであきらめないで「一生懸命」に取り組みましょう。そうやって自分の未来を創っていくのです。

私たちの未来は、いつも「一生懸命」が創っていく。夢を叶えるために。